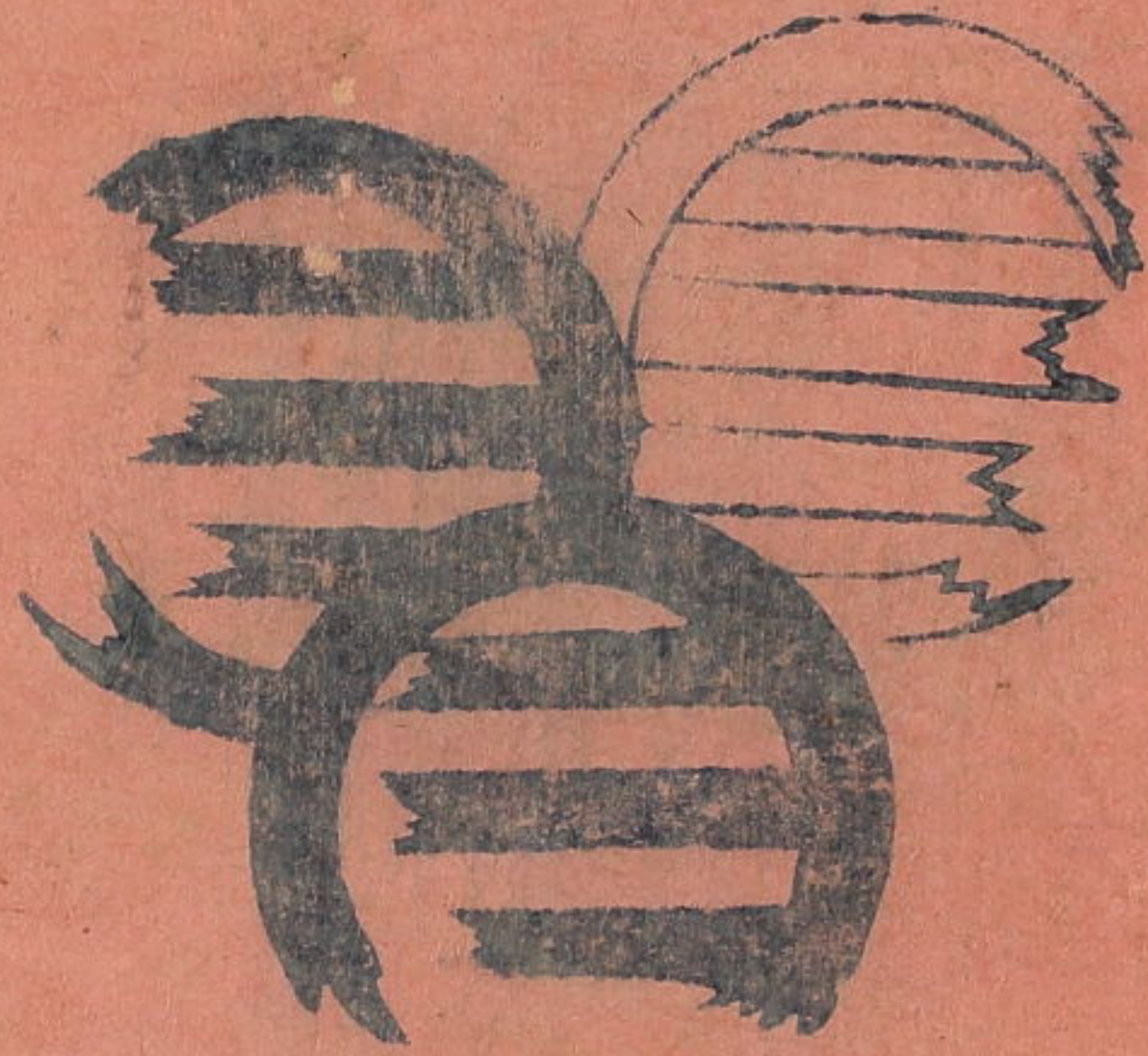


朝夷巡鳴記

第四編

卷三



13  
704  
18



門 704  
卷 18



東唐志水著 考幣餘事 全二冊 題詞詩選 全壹冊

奧疑先生撰輯 書畫比白宣 全二冊 題詞詩選 全壹冊

書畫必用の小冊 諸君子常小案上小備置なすて 其目在と得と云ふことありしを 實は書と教上の君子 必携し扱易の珍寶とも可稱小冊なり

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓

明治三六年 十月九日 購未

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之三

東都 曲亭主人編輯

中輯第二十五 浮雲の富貴草 濡衣乃弟古鳥

却説文字掲ハ必るも外るが。時夏小説動され心頻又安らね。 遠しけ小浴廬をぬく。おのが局へ退り。うち響る眉帯小抱る顔を 塗くも化粧果て結髪へ人小任り鏡臺小對へ影とこれ二人後中 一人梳頭の婢兒の智恵も此彼と三人合さ文珠鬘聚る融す後 毛の何う怯ま後髪際も運熟せ櫛の齒ふか多思ひのあやうも 誰の黄楊の長柄擲解ても釋ぬ謎こへは釣毛欵片心浮鬢結 の落著ぬ胸小湛く鬢水も浅くへ汲ま。虚言欵實交ありせふその

仇人をいぞ知らんとかふくふひふら梯笥の蓋のあけていらぬ身乃  
 吉凶の凶祥ありあふこがうん成衛りあて髪袿の神ありあは後ひつ小  
 ちく羽衣あ死身と今さう小悟らぬ世小りうまをう在り忍ふ鮮衣の  
 飾整ふ時を程し多かり程は文字搦へ胸の苦勞と黒髪を既小  
 結さ果しうごる疑ひを釋しうちるまぶ且枕をとるうて裳小衣と  
 被さう臥さるひ居てさひ只時夏小いられり成ひあくと按さる小  
 最上の川は使ふ鷄ハバ腹を肥さんく人の為小鮎を捉る喙小  
 傷さまひひそと被さる何曾ハトありあは度の小ろ成推さる小鷄鳴ハ  
 これ鷄東二あるん鮎ハ吾侪をいふるべし渠ハ玄歳の玄雷月吾侪多ひ  
 けもさう洋人時夏小下さる小ひくそむくその程さく召返され後竟小  
 その人逢さるる比さく殿小経任諺し文字搦を追退け刀野太

郎小賜ひと卒介さうせしうと殿ハつと聴しむと渠又佳姫を  
 のく吾侪小代んとうつともそれお今小夏ゆきこれ小う鷄東二ハ  
 吾侪を憎むとある人の竊小告しるもの加旃頂日ハ渠御氣色と  
 蒙りて閉籠さるるをさうさう諫書を進せ殿の軍を外あり奥  
 ちうての明しあはれさうさうぬとさうとゆりその亦吾侪ある小殿ハ  
 遊興と耽りあふとあはれ故小あはれんむと然ちるるとその言を用ひ  
 らさるるのさうと吾侪を憎むさう増んかうさひさるるのさうも當らば  
 口う小仇人の鷄東二あり其をいれを御さる吾侪ハ遂小渠さる小  
 害さるるのさうとあはれさう少も被浴室郎ハ吝るるさうと殿と恨  
 情ありさうと吾侪を恨むぬんとあはれさうさうさうさうさうさうさう  
 誠を盡さるる再び物成按さる小刀野ハ敗軍の咎ゆり今雜兵は追





渠外ねがあやましくうちこほ龍りゆうまき居ゐる。諫書せんしょを献けんす。刺殿さしだんの奥おく中ちゆうりく。おん  
遊樂ゆうらく小耽せうたん里りものみか文字もんじ掲かげ所ところ為なる。人ひとをまじりてまじり亡なす。御遊興ごゆうきやうの  
根ねを折せむ。且かつ忠臣ちゆうしん小あまをおん賢けんむ。さうくさのびく小刃せうばを磨をる。隙ひまを  
窺うかがふ。正ただしく人の告つとげ。浅あきりたる限かぎり。竹たけをおんひき。人ひとの怨うらみと禦おんん  
正ただしく難がたく。渠みちへ智惠ちゑ人ひと小勝せうま。計かく。長ながく。のちま。了りて。軍師ぐんしあ  
せ。さ。け。め。妾めかけを。終つひに。計かく。命いのちを。其そのれ。小隕せういん。不なぶ。おん。側せわ小せうけ。つ。と。  
今宵こんしゆう限かぎり。小あま。と。有あり。撃うつ。小あま。ひ。定さだめ。ご。さ。あ。ん。名残なごり。之これ。惜おぼれ。く。  
哀あはれ。とい。く。宵よ小塞せうさい。不な覚しらず。小涙せうなみだ。を。落おち。て。お。面おもて。と。汚け。せ。飲のみ。ま。り。越こえ。度たと。  
小せん許ゆるさ。せ。あ。と。時夏ときなつ。が。か。け。る。謎め。を。解とく。解とく。言葉ことば巧たくま。小い。ひ。廻まわ。これ。や  
解語かいごの花はなの雨あめ。散ちる。如ごとく。歎なげか。り。經任きやうにん。た。ま。成なり。ゆ。く。隨まり。小あ。又また。死し。頭あたま。と  
傾かたけ。卒つひ。思おもふ。と。久ひさし。く。あ。い。う。あ。い。う。呵あ。と。と。ち。笑わらひ。文字もんじ掲かげ。お。み。か。ま。ひ。あ。ら。ん。

暴道ぼうだうのいぬる比ひより。か。こ。ま。ま。を。り。ま。ご。う。且かつ。成なり。諫せん。る。の。あ。れ。と。諫せん。の。中ちゆう。小  
文字もんじ掲かげ。の。文ぶんの。字じ。ど。も。い。ひ。ひ。る。の。な。り。渠みちへ。余あま。小仕せうし。し。り。年とし。来き。を。歴へ。く  
け。ま。主ぬしの。為ため。成なり。ふ。と。も。い。ひ。ひ。り。余あま。が。愛あい。妾めかけ。を。亡なすと。計かく。と。死し。後ご。渠みち。さ。る  
あ。ろ。あ。ま。ま。く。う。う。ぬ。夏なつ。を。欲ほし。く。も。汝なんぢ。の。深ふか。窓まど。小あり。渠みち。へ。閑ひま。籠かご。られ。く  
宿しゆく。所ところ。小あり。慮おぼ。る。小足せうそく。る。の。ち。ま。り。ぬ。汝なんぢ。が。為ため。小人せうにん。と。命いのち。と。竊ひそ。く。暴道ぼうだう。と  
防ぼう。せん。公こう。中ちゆう。と。く。あ。う。と。慰なぐさ。む。の。伏ふ。拜せう。と。巖いわ。鷲じゆう。の。山やま。も。數かず。さ。る。ぬ。高たか。れ。の。君きみ。が  
御恩ごおん。あり。就つ。く。も。又また。ひ。つ。心こころ。苦くる。し。死し。と。ゆ。り。時夏ときなつ。の。罪つみ。あ。ま。と。浴ゆ。室むろ。郎らう。小せ。う  
色いろ。と。う。り。妾めかけ。が。浴ゆ。さ。る。毎まい。小壁せうへき。を。隔へ。く。その。声こゑ。を。ゆ。り。ゆ。ま。と。と。さ。る。と。あ。り。  
渠みち。へ。何なに。と。も。あ。ら。ん。と。お。ま。妾めかけ。の。と。成なり。羞はづ。か。さ。ん。や。君きみ。さ。る。よ。り。小計せうけい。せ。あ。と  
以も。経任きやうにん。し。ち。領りやう。死し。さ。る。あ。ら。ん。理こと。了り。時夏ときなつ。が。罪つみ。重おも。く。と。い。く。も。亦また。その。奮功ふんこう  
ま。り。小あ。ら。ぬ。小浴せうよく。廬い。の。役やく。を。免ま。す。と。圍かこ。奴やつ。小。と。徴しやく。さ。ん。飲の。み。と。今いま

小決めごと。渠ホぐうまぐうまといふを更蘭しうゆれと寝ん誘  
 とむるや小ふみか携りて臥房小入る小なり。かくその詰且神井鬼  
 六猛虎鐵指矢藤五重連珍浦五十五六方相踏犬吠又陰行ホ  
 連署し。経任を諫るや。某ホ頃日ハ間諜者をりて敵の虚実と  
 撈窺とふ小光仲が陣中。時疫よりて死するもの甚ヨク且その兵  
 糧乏く形りて進退難義小及ぶといふ。便是天の祐る所なり。く  
 龍鼓むべれめのこち。あつこども。君公後堂小のこま。や故小士率かのつ  
 々小怠りて。戦いのあろるや。おや正廳よ出りて軍議の憲制と  
 多る幸ひ甚し。もんを書りたる。経任これをこめて已に成るぞ軍  
 議の席小先とる時文字掲を召迫つけ。言は云云の義ゆりて出  
 敵を龍鼓んと欲と然バこの序とりて鬼六ホと密譚し汝が仇の真偽成

探らん。かきふた小早暮し。姑く樂を俱小えう。さびと心と放し。く  
 こと敵小克日を俟必かの成あひそ。叮嚀小慰息とバ文字掲涙  
 ぐぐぐ。堂と廳とかりととも。かか御館の内あると刃心まぬべれと  
 ろる。あハ快樂の喜見城彼処を生死不定の場牡鹿の角乃  
 束の間も。おん側小は信とむ。まが死この日をつゆと消さる死といひ  
 うけく左右袖小顔とわ。當ま。経任のまは立かぬ。鬼六ホよとむく  
 請とく。るうやよ小なり。さ。程小時夏ハ嚮小文字掲を謀んとく。  
 外さ。驚せ。その折小はあや。彼九尾の狐奴が。遠く浴果入。  
 曾女。ぬ故あ。渠ハ素よりその性伶俐。や。こと意と釋さる。  
 んや釋ハか。修羅殿小鶴東二が。然ら。謀行り。と。  
 と含咲く。又その次の日をま。この朝も文字掲ハ第一番小浴小童

女ホカ声高く。浄湯を呼ぶ程小時夏ハ忘と答々湯を溢るまゝ  
汲りける。覓を文字掲えりて。

篝火のみれ苦く鶺鴒の縄も最上の川小うけくそと再之び

口遊みさぬさすのふく浴廬を出り。時夏ハ風雅小疎う。歌をよく

知るのさげねども今文字掲が詠し。三十一字を致すよさのふけ

しるこ謎をよや鶺鴒東二がうくと解ゆし。成外さう。これ小知

まゆ歌ありえん。さうらんよ速事を行ふとそらめは彼暴道ハ

智ののめし這奴小まるととあふ禍選りてこが弁小及んよまどこ

かやゆふげ秋とく。その便を俟む小徑任ハ軍議は請れ小内房ハ

在りまるとり。小婢見們ハ名ひりまぐ。且く暇あつ小るまるとこの故ハ

けの五人三人。うち立く浴漬小時夏が火焚の役も平日ハあま

まて果さ。この時をりも虚小過さ。何の日ハ本意成遂げれさいとく

心いさぐ。準備の一刀服袂と庭掃の小僕小紛。庭門より偷ハ内房

の光景を穴窺ふ。この四下ハ他木をよぐ。目よ入る限ハ幾百株乃

牡丹園中ぞあまけり。この花あま。文字掲が愛りて。でオるとあふん

と多る。む拭きりて。面を畏れ。足を偷れ。項を伸。遠小内房のこさ

見る小いと静ゆ。音もせむ。時ハ下晡小志。夕陽小色をま。花を

紅あま。白あり。薄あり。濃あり。名もま。よけ。牌又むとむ。折

ちる。ね。頭ま。く。隠ま。見ハ牡丹小狂ハ蛺蝶の葩をう。遠さ

て。心も覺も。あ。著む。渠り。あ。ま。い。今宵臥戸小潜

入。便も。か。と。葉。戀。ぬ。怨。の。寝。小。合。小。竈。ひ。り。か。る

折。文字掲ハ稀。ある。非。番。よ。う。寂。く。夏。の。日。消。一。慰。め。く。移。り









榻を投せしめ、のち問む。く知るべし。この草稿を懐紙乃問小  
 入と云。忘れし。小身よ著て。遠く白紙と云。のち刀の濃血を拭ひ  
 る。暴道奴ハ才小諱。我意を建んと。瘴あり。こまゆと。の合  
 ち。この小竊小文字榻が。これ小云と告る。何や。さう。た。こま  
 猶。さう。の。あ。と。さ。の。さ。さ。せ。故小遂。又愛妾。喪。り。這奴  
 憎むべし。腹まき。汝ハ。野の士卒を。お。暴道が宿所小乱。入。り。く  
 首。撃。つ。こ。ま。ふ。ん。せ。よ。捕。を。逃。し。と。敦。圍。々。券。紙。捺。し。齒。を。切。り。刃。を  
 震。し。と。怒。り。多。鬼。六。つ。く。ち。や。く。膝。拍。鳴。し。と。嘆。賞。し。君。公。乃。賢  
 察。寔。小。當。と。兒。憤。し。亦。宣。り。さ。ら。あ。と。寄。の。軍。兵。間。道。く  
 通。く。久。く。柵。外。小。在。り。今。兵。を。動。し。と。躬。方。の。大。將。を。撃。つ。多。く。敵。小。勢  
 の。添。ふ。似。り。且。く。愚。意。と。め。く。ま。る。小。明。日。交。小。假。托。く。暴。道。と。詭。引

せ幕の陰小力士を伏せし。文注所。く。誅。し。是。安。然。の。良。策。と。ん  
 但。暴。道。へ。思。慮。才。幹。あ。り。け。と。さ。と。その。劔。法。剽。技。も。亦。衆。人。よ。提  
 ち。互。捕。隊。の。大。將。を。擇。ぶ。し。中。小。矢。藤。五。五。五。六。吠。又。お。ハ。皆  
 暴。道。と。交。り。篤。し。今。こ。の。二。頭。領。を。除。れ。と。時。夏。小。勝。め。の。あ。り。そ。の。他。ハ。暴  
 道。が。敵。小。足。と。も。某。又。その。副。と。り。て。時。夏。小。力。と。勅。さ。暴。道。縦。翅  
 木。と。も。逃。走。ら。る。を。ぬ。い。願。ふ。時。夏。が。罪。を。宥。め。く。捕。ふ。乃。大。將。よ  
 志。多。く。渠。歡。く。粉。骨。と。竭。さん。か。く。その。功。あ。ら。ん。小。ハ。彼。を。り。く。此。小  
 換。ふ。一。個。の。頭。領。を。誅。戮。し。と。又。一。個。の。頭。領。を。用。る。と。是。君。臣。の。幸  
 多。く。賢。慮。如。何。と。真。し。と。言。詳。小。勸。と。任。任。こ。の。後。小。後。ひ。て。要。時  
 怒。り。を。忍。び。つ。翌。の。捕。隊。の。分。配。を。み。鬼。六。小。任。せ。り。抑。神。井。鬼。六。も。月  
 来。暴。道。と。睦。し。と。又。時。夏。と。見。小。員。也。小。渠。く。其。意。小。協。べ。と。下。め

鬼六時夏が圓山の館を攻落し。信夫莊司を殺し。暴道竊小隊  
 兵を進め、筐姫を生拘り。経任小贈に當時その功に鬼六  
 時夏ホが上小あま。件の西賊將ハ暴道をい。恨り又時夏ハ  
 この春や。鬼六が副將あり。小暴道が鎮守府あり。故城を成る小及  
 ひく。その副將小せ。時夏ハ亦こ。成致。乃  
 猜忌ある。龍蛇茂林の敗軍の比。鬼六の。経任を諫。時夏が  
 死を救ひ。今又渠が為小勸解。捕隊の大將小薦揚け。是。その同  
 氣相求め。巳。勝を。小人の奸智。出。類。一  
 况賊將の。便。是。毒を。毒を。人。間。詰。休。題。  
 蘇塗鶴東二暴道の敗軍の外。小。龍。量。小。頻。小  
 状を進め。経任を諫。と。用。も。あ。の。甲。斐。と。ひ。

経任俄頃小後堂の遊樂を退け去て今朝。軍議を。灰小使。交  
 一。原来諫言。空。既。その非を。知。せ。の。憑。と。経。ひ。ふ。その  
 次の日。経任ハ使者を暴道が宿所へ遣。敗軍の罪を免許。を。出。仕  
 去。軍議小加。と。い。せ。暴道ハ欣然と。疑。を。脱。て。礼。服。を  
 整。後卒の汰。侯。件の使者と。つ。立。軍議乃。席。赴。程。小。垂  
 幕。索。断。落。身。甲。暴。雄。ホ。と。見。出。御。説。と。呼。子  
 暴道を。龍。左右。組。と。暴道ハ。見。些。も。駭。か。ず  
 眼。瞪。無。礼。さ。せ。と。振。釋。死。再。び。寄。を。搔。脚。て。撞。と。投。退。け。撲  
 仆。手。煉。の。早。技。撓。と。と。と。瞬。間。小。五。六。人。或。ハ。頭。を。打。裂。衣。も。條。臑。甲  
 足。を。折。と。生。死。を。考。ず。倒。と。透。を。窺。時。夏。ハ。鏢。衣。小。條。臑。甲  
 臑。甲。裾。短。小。打。扮。短。柄。の。鋒。を。閃。也。と。声。子。衝。出。と。成。る。乃。



襲ん為るまむる某浅智短才まども厨川の赴きく弾平太小力を勳し  
 彼如を成らぬ過失あつたこの浅きと真実いげ速まら経任大に小  
 悦の重連が遠謀の意に稱へる汝が厨川を成らんまこれその日より  
 後かをけんあつたま多く兵を日うち遣し難し只その私率のまを夜に  
 紛まし柵を出しこれ術をのめ汝を助けん準備をせりとのまがて例の契と  
 通す小免矢藤五の欣然とて件の契を受納めその夜更蘭て服心  
 の賊僕五七人をねぞく潜る後門より出程小経任の幻術をのめ天城  
 曇る風を起し竊小これを資し矢藤五ホを障る寄りの陣前を  
 うち過る厨川と投く走る夜を日小續ぶゆそくみくを彼如小  
 来著し象子彈平太負持小對面し又偽る使者と稱し更小経任が  
 命を傳るく平泉の數度の戦ひゆりて矢種甲由之くまぬこれ小

よる當知の貯らまる軍要金三千兩をばりんとく某は通し多  
 と真一の小演説し件の契を證據とせり彈平太の頭領する鉄指  
 矢藤五が使者よ立て主命を傳るぬれ一毫も疑はざり日矢藤五と  
 留めく叮嚀小郷食心次の日三櫃の軍要金を通す小これ矢藤五ハ  
 ありて後卒ホは扛擔しるさうぬ容めく彈平太ホは辞し別は往方も  
 ちまむるまふけりこの後兩三日を経く平泉の石室の秘書紛失  
 の露頭し又矢藤五の厨川の柵を成らぬ二千金を略奪し逐電  
 せしゆゆのえいふ経任を蹉跎し罵り憾めませまどあこの比又  
 誰いふとある文字柵を殺せりこの時夏くと風聞をり経任はれ  
 疑心生り又彼血に染る字紙を檢る小暴道がも迹小似るまども熟  
 覽まは似る非なるのえ只疑をまはのまらま又文字柵は使れる童女





病臥きのの枚擧す小違あり。光仲は且く攻撃の機を先  
 りつら陣中を巡り病を妨ひ薬を与へらる心成用じとも瘡のの  
 絶れ。傳流りのヨリ首と並べ死ぶ稀に現陣中へ療治保養  
 便か。光仲を憐れ新小附後ひ兵の病臥るを。五人。潜復  
 扶乗し。郷里へ送り遣し。又遠く後ひ来る士卒を鎮守府の城遣ら  
 本復の後參會す。下知ける。この故ふ。千五百騎とやめえ。僅小七百  
 餘騎小なる。中小ま。二百餘名。病疲の。役ゆら立る。の只  
 車ゆ。惣大将光仲以下佐味下河邊城戸水草の數輩ハ。急あられも  
 夫運の。初彼此。郷士野武者。附後ひ。俄頃小  
 勢小。日小兵糧を費すと亦。これ。廣綱もその意と  
 を。鎮守府。糧を續ぐ。柱。光仲廣綱の連

署小佐味高利加判。屢國府へ使者を遣し兵糧運送の催促等。これ  
 と守護頭人。光仲の功を。事小假托。その催促小後。程小春。四方の八重山翠増。夏。光仲も今。糧を取る。小方。士卒飢渴。及んと遠。時小四月十三日。光仲。早下河邊。高吉を召。兵糧。高吉。今。既小難義。及。計。一。日。餘。あり。立。の。足。る。度。既小難義。及。計。も。や。と。い。ひ。歡。息。を。光。仲。の。点。頭。亦。豫。さ。る。の。諸。將。士。本。陣。小。集。令。と。限。る。つ。又。狗。と。期。及。説。示。高。吉。ハ。外。面。へ。退。少。選。と。城。戸。武。詮。來。た。が。

光仲へ左右の人を遠ざけ、武詮小くら、對ひ和殿を招き、別議あり  
 ありと、兵糧既小竭、士卒飢渴、小及んと、和殿へ國家の爲小死ん、欬又身乃  
 爲小脱とん、欬と問ひ、武詮、實あり、氣色を變、く、声を激し、六尊向とを  
 ち、何えぬ、め、の、か、逆賊の、ま、滅亡せ、を、私怨の、か、報、ふ、と、成、り、を、綴、糧、竭、て、去、を  
 食、ひ、泥、を、啜、ふ、至、る、も、進、く、柵、を、攻、ん、と、欲、ま、富、足、く、壽、を、有、ち、玉、成、  
 炊、を、食、ふ、も、豈、下、歩、も、逃、ん、や、さ、ろ、ろ、乃、は、高、中、小、怨、を、れ、  
 光仲、莞、尔、と、ち、咲、く、曰、ま、その、義、勇、を、知、る、所、以、小、印、を、和、殿、と、招、を、  
 今、の、言、ハ、戲、れ、の、と、曰、ま、今、宵、柵、を、攻、く、運、を、試、ん、と、さ、ふ、一、和、殿、と、ま、や、  
 隊、兵、三、十、名、を、招、く、竊、小、近、郷、に、赴、れ、車、十、四、五、輛、を、求、く、穀、の、藁、囊、小、燒、  
 草、を、籠、こ、め、三、が、一、少、火、藥、を、籠、く、ま、と、兵、糧、を、積、る、車、の、如、く、小、ま、  
 して、日、暮、く、後、小、時、刻、を、考、三、十、名、の、隊、兵、小、件、の、車、を、推、さ、せ、り、  
 四、更、の

比、及、小、日、が、陣、門、小、到、ま、賊、徒、遙、小、これ、を、見、  
 兵、糧、を、奪、取、ら、ん、と、  
 ま、と、め、し、  
 又、水、草、太、郎、五、小、謀、を、授、け、  
 救、小、如、く、  
 偽、肩、て、逃、ま、せ、ん、  
 賊、徒、ハ、兵、糧、を、食、  
 逃、れ、追、  
 車、を、奪、  
 引、入、ま、  
 和、殿、ハ、  
 士、卒、十、名、と、  
 約、  
 神、識、を、  
 擡、遣、  
 賊、兵、の、中、  
 小、雜、り、  
 柵、中、  
 小、紛、  
 入、り、  
 件、の、藁、囊、  
 小、火、を、  
 放、  
 城、  
 櫓、を、  
 燒、  
 城、門、を、  
 開、  
 亦、  
 其、の、火、光、を、  
 暗、號、  
 走、る、と、  
 飛、鳥、の、  
 如、く、  
 士、卒、を、  
 進、  
 柵、を、  
 拔、  
 賊、徒、  
 謀、  
 知、  
 覺、  
 柵、を、  
 或、  
 入、  
 和、殿、  
 柵、  
 入、  
 賊、徒、  
 小、必、  
 號、  
 語、  
 如、  
 柵、  
 中、  
 小、  
 入、  
 火、を、  
 放、  
 及、  
 賊、徒、  
 小、

知らざる生とくえんぬ。一人もあぶくもどき九死一生の苦計に智勇全き  
 のふあふれぬ行ひるあふし。和殿を擇用ふ武運の長短この  
 舉にゆき。と説示せば山詮感佩を異説小及びも欣然とく  
 退死。二十名の勇卒をひく潜て近郷ゆを赴死。却説その曠昏る  
 佐味竺内高利下河邊小三郎高吉水草太郎五昌之ハさうこすん  
 頭ぢちたの兵小駭本陣は集會し地上小圓坐を敷並べ処小箭火を  
 焼し。大将の下知を俟小光仲ハ時を殺ささ篁子の端小立ち幕城  
 掲せ床几を退け儲の席は著く程小衆皆も無頭を低齊これと  
 敬と光仲も亦礼を答へく衆人うち對の諸賢時刻と違へり。  
 遺る會合せらと終ひこれよあめあり。かどと光仲ハ武運始終全  
 うも曩ゆら謀り如く經任怠慢の心成生く。みづら軍議を度と

甘と小声色小恥りく諷言。信軍師暴道を殺せ。賊將矢藤五が  
 徒脱去るのヨメと彼も當小是攻敷へ死の時ありれもいふせん  
 陣中時疫小うりく死亡せり。其甚まか。この故小賊をその圖小入  
 と父とも柵を攻る兵足さど躬方の運の短き所歎す。小かゆは兵糧  
 既小竭と明日の糧あり。鎮守府も亦如此るべし。さうバ何知は食を求ん  
 進退不く究りぬ。宜小危窮存亡の秋なり。志く光仲ハ微賤より  
 興り。の大任を奉り且録倉の管中あく。對策の日兵糧の。小向を  
 小某對く臣ハ兵糧の續ごん。小忠心とせむ。只經任が首を獲るの  
 一日も速あ。小成ちりふの。とヤせ。今國府より。兵糧運送  
 遲滞さ。甚しハ護。況兵糧竭。何方小向て軍をかへん。  
 餘人。小光仲ハ一騎。今宵賊柵を攻敷。く克す。

潔く戦死せん是則上の鎌倉殿の武命を辱めなるとも次小廣瀨朝臣  
 の鴻恩小谷んとあふの各位のことと異え九妻あり子ありの孰も企てその  
 戸毎に俟ざらんや鎌倉殿への忠節も此度の役も限らぬあふを云んと  
 ちのふゆの身を取らざらん性命を全うし後の國役に立上る人光沖  
 とて捨てることも一毫も恨みなくとてせよ高利高吉昌之小こは  
 彼あふを声を激しう情をさそそを兼て父家心忘れ妻子は別れ方を  
 殺しと名を留め子孫の栄を思ふゆゑの武士の常情あり吾們麾下小後ひと  
 賊を殺ししうあふの愛顧と蒙ると浅くも生るも死とも安危を言賀殿と  
 俱にせましく欲せし小逃下りてむら軍談に難く臨て免る兵本意  
 とく今更に誰う亦蓬た心成存せざる糧竭き饑小臨て果敢く死  
 働死するが誘ふ共侶小宵賊柵小推しけし鐵壁ありとを打破す

經任が首級を獲ぞ柵を首めし死せんのも他更多くと辞むとく答々  
 四下を信と見りてせよ衆皆阿と嘆唱し遠微妙くいふ多る吾們が願ふ  
 所三君の存念と同らまらばと諸声合し或は矢を折り天と拜と  
 誓を示し必死の覚期小光仲う感佩しその義烈を頌賀し諸賢幸小  
 かの如くささるるの攻撃んと難くもささるるとして血氣小任しく不覺小進  
 謀の軍をささるる可憐命を損せぬ小あふとこは聊謀ありをの城戸  
 四郎ハ隊兵三十名とぬく既よ近郷小赴れりその謀如此くこは箇様  
 箇様と説示しかこ水草太郎五ハ百五十騎を一隊とす柵よりいでる  
 賊と戦ひ偽負くは又病後のも本復せざる二百餘人の陣中甲り  
 守りて徒土鏝を鳴り鯨波を揚續た攻掛る如くささる光仲ハ佐味  
 氏と下河邊小三郎と共小三百五十騎をぬく一の城門を攻撃し武詮が

計行とて火の叢を火に食速に騎へたり。時刻を今宵四更の比と定め  
 二更の比に至るに士卒飽ちて食まへり。謀合期せむ。かのく  
 箸を取るとも既に今宵限りふしをあらはし將とあり士卒とありと  
 生死存亡を俱にたると過世怪しき交りあるまじきや。いづく最期の酒を酌ん  
 とく土器せりてとて呼ぶと唯と成り幕の内より兩三人瓶を搥て  
 出るあり小四方小酒杯を載ちて成りあり。當下光仲へおのれまじ  
 毒試をせんといふ酒杯成り取て「口喫く衆人よりち對ひ陣中糧まじ  
 竭ちふといふ酒あふん水をめく代りとのまはる佐味氏へ憚せんと  
 いひけり。盡き盃を二内受てうち戴き又高吉より昌之と次第よ  
 巡る盃の影も隈なき夕月夜山杜鵑ちちり。西の天へを鳴らる彼や  
 冥土の友飲ともいひの躑躅よとんごど死天の山路へあるもふ越るん

の成とち多く小死を究めり兵の支も殊小懸しく食慨然とち仰げ  
 二内高利進み出現かむるの酒宴小敵も死に送憾し各位要時等  
 へ高利敵進せん何をさす。小頭を傾け扇を膝より上へこの酒へ素  
 りと泉の水もさす。酌ちも竭し御方の武運名ありあつる平泉を一呑  
 喫せめてと声張揚ち謡ひ出さ高吉へ扇を披ちて翳の袖と翻し  
 舞々奥を透ちふらん衆皆冷也とち。唯！先仲も亦笑片向く佐味が秀  
 句を答へりける。説話分兩頭。いとも亦憂い。洩ぬ方ありあまどひと驚  
 の中へハ筐姫のうらさる。今歳仲春圓山ゆく田を脱れ出ると死旅乃  
 杖とを棄物とも懸しくちひ弱竹と鳴江ハたち途に轍とて。こころハ賊  
 徒小生拘らる。徑任が目前へ牽居られその日よを殊も渠が恋風小靡ぬ  
 松と操の命強顔く譴責らる。いそむくその辱めをも信夫の翁が啼



かほとけ竿のまつのあひ衣  
 志ねともち袖をかこくぬ

朝霧山



みらねく乃  
 つきの川の  
 河水も酒と  
 ら免ふこと  
 えひふけり

下河辺高吉

佐味竺内

朝霧山



謹んとして賊率亦日小三遍捧衝鳴りて来つるのそ昏へ終日松吹風と  
 夜へ通霄堰落を彼壑港の水音より外小言訪みのそなり憐むべし  
 筐姫も熟ぬる業小構衾を衣るる賊兵どもが垢さ血を被る  
 せし衣いさらすく解さるく鹽小載せし水際や推りて遣るるも苦し  
 死小下里立んとく踏かふる登崩と苔深く岸滑小水高し落るる駝と  
 論む身を投めり移るるや日浅瀬さびく細脛を濡せば寒は春乃  
 水もろと揚る片足へこれ似るかも白鷺の友の白も形はるる  
 細布の一衣浸し揮濯けぶも堪るる入るる岸の薄氷揺碎き  
 さら浪さる水の文をこるる小膽絶瞑眩と人氣のあふ大江山びくその  
 鬼は捉まらるる風流少女が解渡ひかむをけんと身はるる小多のありく  
 とと泣く涙の川もさるる温るる裳裾は袖を濡しと哀れ

まるまのりく日ぬ衣の怨家の垢を洗へとも身の恥と良人の恥雪る  
 ともあふ櫛小も荒足と鍔刃を磨ぬ玉乃顔も塵埃染た身  
 雪の膚解と乱る黒髪のもた艱苦も良人の為とあふ忍んと  
 多くも竟る疲労果と十と定め衣の敷足は移る忽地徑任が便  
 室の小庭小牽とせられて憂と憂と音小響く良人の呵責と目よ  
 見せし人の憂ひを身の樂と小笑ひ戯る怨の數と復す力も裸  
 緋は勝ぬ良人の命のいと惜さ小勸解と翌より又渡り水温とむく春  
 の日も花さるる日数経と夏も来りけり香久山の山よはわぬ  
 水際の松も衣乾しむるも不樂積る痞小病著の重枕も許  
 さるるの俣ぬく玉の緒の絶と多くと生憎と絶ぬ歎のあやとも  
 ときく時より貞は卯茨開く四月十三日小ちのあふ痛く死なまきのふ



まる。翠帳の下小養と深窓の裏小人と成り良家名族の息女あれ  
 と今ハ賊徒柵中の院婦とあり果て艸舎小を置きて夜を  
 殊更小物寂しく夜行の撃柝を遠く彼此又松風蘿月  
 の外耳は觸れ目小遮るのあり寝らぬ中も小終夜佛乃御名を  
 唱へて過去あり實父母養父母親族家臣ホまて戦死せしめ  
 菩提を吊ひ現世あり良人の天運循環して會替の恥を雪先絶  
 ち家と興し廢する受領を續せぬとを禱しける夜も燈火と  
 置くは許さば暗室小坐して曉るを俟の冬の日小未  
 枕の辺は雪を束ねて明を取るもあはれ夏はやあはれと  
 螢の影をくぐり窓小光を引小由あり今宵も満天は雲とるを  
 仰上は真如の月高く昇り清光白屋の檐を照し入之とバ  
 ひと壁小添み共小物成るは水路近う弱段の風小  
 戦ぐ秋鶉鶉の音々々何の故小夜は寝らぬ青山遙小  
 松声の祝は響く秋杜鵑の光惚げる誰か為小屢價を刀耳小  
 竹くの悲を増ざると目小入るの腸を断るは怒あるを  
 責て過去来とるひは雙敵経任が殘忍や且性急るも  
 冠者を亡ひなむ吾侪を随せんとの海許の  
 屠所の羊とあるをなぐるも命恙ある不幸の中乃幸なり  
 吾侪亦彼が微を容さる小氣を靡くを俟んとする文字搦と中  
 存命する亦是不思議の幸あるは秋あるは日糧と遺り  
 来る賊卒亦不問語をせし小徑任が愛妾文字搦と既は枉死

存命する亦是不思議の幸あるは秋あるは日糧と遺り  
 来る賊卒亦不問語をせし小徑任が愛妾文字搦と既は枉死

しくけし経任のく吾侪は逼り。彼愛妾小換んとその遠より。  
 と心のくあり。さか吾侪が死ん日も又遠よりと覚より。経任遠小本  
 意を遂ま怒り。冠者を殺やせん。が牙のちを潔う。死んと  
 さま共侶不良人を亡ふの憾あり。さてもかくても死ぬる才乃。心はまを  
 爰小若。めらま。人あり。ぬ経任が心の鬼の迎を俟べ。や水屑と  
 ちかま。あのお塹港より脱れ。遂小寄るの陣。又赴死この柵中の  
 虚実を告。守られたこのほ。御方の兵を導。そのを  
 塹の埋草と。冠者を救ふ。源氏の将帥九  
 郎判官の女小。父ハ矢嶋の戦ひ。小船八艘が端より端へ。飛  
 遷り。女子も水小。荒磯の蟹。波乃

底ゆく樹を。念疑。火中入り。水をも涉さ。やハ巴ん父  
 判官の信。山城鞍馬の毘沙門天。近く。膽澤大明神。月来  
 念。圓通寺の観音。薩埵。今宵。匡小力を。勦。彼。斬。再く  
 渡させ。と。禱。外を。仰。月影。推。夜。尚二更の比。賊徒。要害を。憑。夜行。力の。稀  
 あり。外。立。水際。赴。又。不。廣。塹。水。戯。中。不。真。似。鳥。要。見。西。三。歩。立。戻。り。門。傍。倚。洗濯。盥。を。引。起。魂。の。夢。小。見。せ。く。も。寄。小。告。終。め。讐。を。亡。左。右。の。成

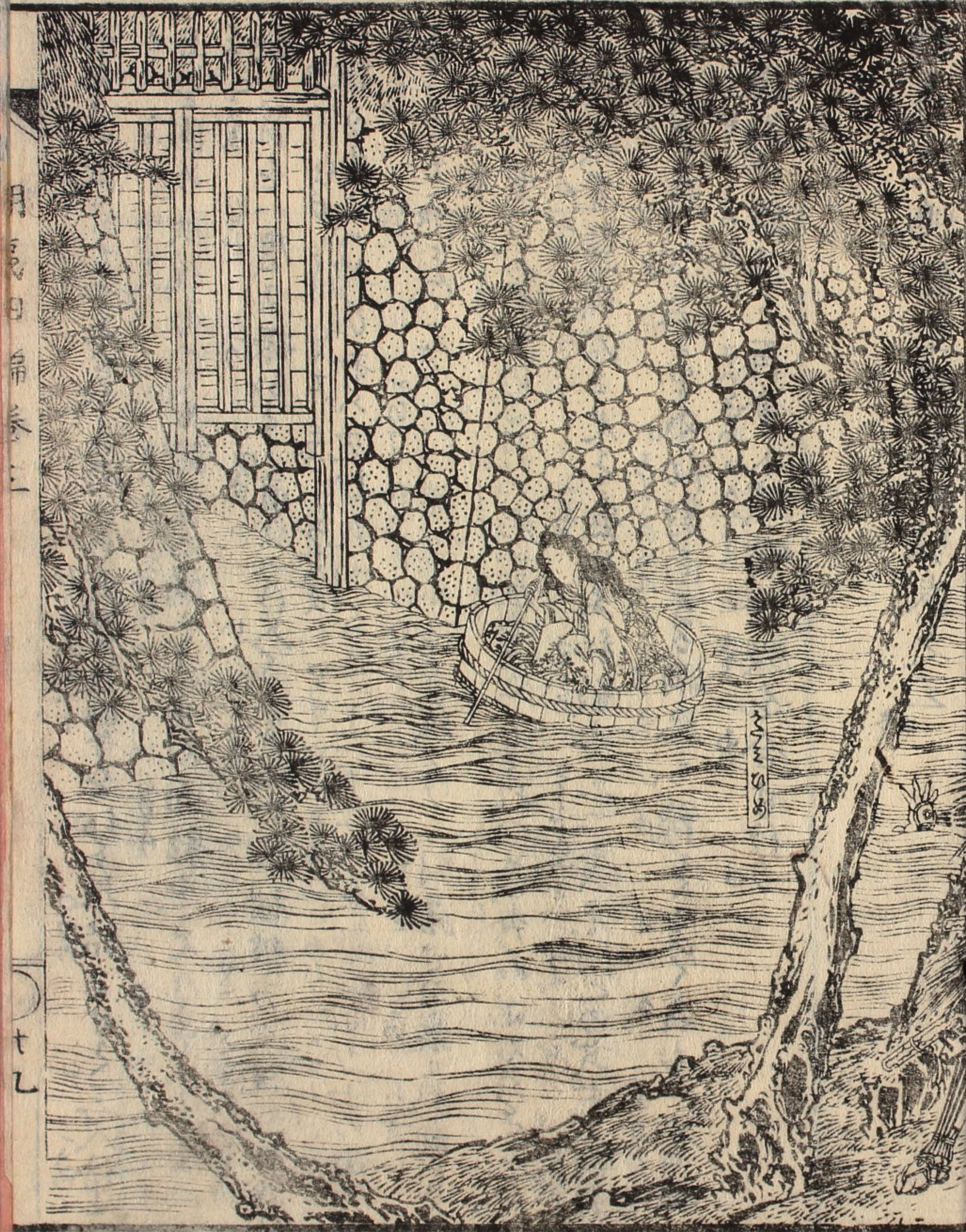


らましく又ささ小辱め小ありんより。そく論えと目を閉て念佛十遍をり  
 唱る。身をよせ監を覆えんとく縁ふら成かけたるが又思ひ久きやう。  
 渠り追隊の賊兵さふふ。な肩夥る死小一人立在るふいと不審。等  
 公な間を遠くも隈なき月影小くくんまぶ賊徒の次女は似ざる  
 のあり。あく神佛の擁護小よりて。それを資る者さる救それら。あふぬ  
 欬た多く小死を急ぐ愚さうん。うや吾侪の仇たるまも死さう小  
 邊死とやある。只天運は任せんと多入ハ怖む驚くむ波乃まふく  
 流ささまぶ吹くる風や助けえんむ。海を渡の半を過く前面へ近くなり  
 これども岸不岸やさふらうさざりけり。當下彼武士ハ匡姫をを認めり。  
 豫く用意やまをけん腰小袂一索をさうさく水上小投かる小索の  
 端小鐘あり。鉤をさ著さまぶ窺違はむ。匡姫の監の縁よりら掛く。

まぶ小岸へ引よせたり。かくその鉤を外し。此度ハ姫の帯小くさうせ。  
 鞍馬の山小ありとみふ番卸さうんやう小いと軽ら小引揚る早技  
 力量世間小類まうるべくもあふね。匡姫も夢の中小又夢をみる  
 心地し。吉函を判し。もさく。只忙然とつらなる。容止をつくと。  
 笠の内より透し。こんく。めんが。是吉見冠者義邦の内室ま。や  
 これさ藤園さ。成りて。賊徒の妻妾あささ。成知さ。匡姫小あさす  
 や。向ま。僅小頭を擡。裏く胸小あさ。この入吾侪を助けのせせ。  
 善物悪欬いまさ。さうね。隠し。ハさうく小。あ。う。形んと深念ら。  
 現推量小違ふとさ。吾侪則匡をり。めんがハ又何國の人を。小  
 志く。こ。う。成。を。中。も。知。り。く。助。け。め。の。一。圖。さ。ま。け。る。幸。之。名。告。め。と  
 向。之。も。心。を。さ。せ。く。点。頭。の。一。管。の。呼。声。の。由。を。探。り。知。り。

澄くさるやまぐ吹鳴せむ斬を距ると遙みく叢立る樹蔭より一個の  
 行客走り来り匡姫敬馬死く遠く見久とバその人の年齢廿のうを  
 三四たうべし色浅黒く髯青ひ。花田の袴の夾衣を精悍く裳折  
 寒衣と腰より一口の短刀を跨足より湿染の脚絆を穿たりその人骨の  
 田舎備くこと彼おのづから甲乙あり件の武士へ立形がう彼行客と扱  
 したる。要時耳語れつろ成ゆさう匡姫小うち對ひ婦人かろむむ  
 驚くべうさむ今ハコ名と告うむとと遠うさむと知るさう今宵ハ  
 特小月明く潜ぶ小便をこらうふよつめく問答究めく危いおすか  
 影を隠さへんむこの男を俣へとくとつとせバ行客へその答とまを  
 姫のふ成取り背小引被け足は信しく走去けり件の武士ハ木かろ  
 やうく要時そまを目送りう再び岸邊小立りう水は漂ふ大盥は鏡

索投うけ引しやき甚因石小繫死苗腰より扇を抜出しく斬の徑の長短き  
 向の岸の高低死成すろの中小揃り横さる小運歩く程小暗る  
 天も定めまう叢雲忽地月を包く朦朧とるうよけり浩処は袖附  
 ざう鎧のう成葉小掩し笠は隠しく紫金作の太刀を佩細録の南蛮  
 肱甲小筋金入る臙甲せし亦是一個の潜行武者彼もこの斬ふそめて  
 遙小右のうさうすたれり。件の武士ハ知らむやありん行逢の間よひん  
 とも忽地礮と撞當まむ互小退く兩三歩あるさる騒ぶと信とコハく  
 序よりと吐れり。左のうさ立戻れん又前面より一個の武者打拵似  
 たる菅蓑の腰より漏るる鎧の威毛輪鐵打る鋒巻を竹子笠小隠し  
 てもさる頭より燧刀の金具さす小耀れり岸の螢吹雲きまの星の影  
 秋と疑る。件の武士もこも小懼まむ序よりと吐れり。右へえせむ。



舟水

舟水



脱 賊 篋  
舟 柵 姫  
戎 夜

舟水

舟水

あつこの武者左へくせむ。あつこの武者巨臂をむらえ詰りせむ。二人信と  
 身を固め疾視あつて諸笠小隔くんせぬ面影をんんとかく倚西  
 敵の腕を一度又振かす。直つて入る表法の極秘彼方も挽ぬ相撲  
 の推ふ小突へ拂ひ打ぐ沈む孰間まき一上二下二人を敵ふ小力士の働  
 奉乱とど挑まろ。二人齊一諸笠小隔く引落さば袋も引離れ  
 うれ拂ふ雲々霽々洩る月の影の面をんろつたれつ義秀ぬ小をろとど  
 と向ふ武者能く成ゆとんく然ゆふ和殿まき二廣光何この武士が朝夷  
 ぬ致まのまろくとんろつたれつ初對面まの嗣忠も豫くゆく名を一舊識  
 不思議の値偶と再會小感嘆呼吸を合せけり。

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之三 終

泉岸 思之中村貞纂述 博愛與田頼閱正

頭書 小學作文教授書

全五冊

此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩惟リ作文ノ諸科ニ  
 後ル、ナ憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其發明スル所ヲ實地  
 ニ試ミ其效アル俗文語ヲ用テ問答令正誤文俗文復認法等々各々  
 初卷ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授ノ法ヲ説キ日用短簡文一百餘章ヲ編ス  
 次卷ハ首ニ俗語雅文ノ編ス○第三卷首ニ作文要字(押字)和辭ヲ掲  
 用(願)方(今)流行(文)等ヲ編ス○第四卷首ニ俗語雅文ノ編ス○第五  
 次(成)方(今)流行(文)等ヲ編ス○第六卷首ニ俗語雅文ノ編ス○第七  
 兩卷ハ首ニ漢文要字(押字)和辭ノ編ス○第八卷首ニ漢文要字(押字)和  
 類(從)テ其趣意ト作(方)トヲ説キ他人ノ文ヲ評スル語數十ヲ掲グ○  
 但(シ)毎卷ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且獨學ニ  
 二便スル書ナリ其親切ナルヲ筆紙ニ盡シ難シ四方君子一覽實試以  
 テ其言ノ証ヒガルヲ知り玉ヘ 大阪北區寶町四丁目 前川源七郎敬白

